陳子昂の詩

――その表現の一特色について――

加藤　敏

はじめに

初唐期の詩人、陳子昂（六六一～七〇二）の文學に關しては、從來おもに「感遇詩三十八首」をめぐつて、その內容・思想的な側面が考究されてきた。また表現上の特色は「男性的な力強さ」「自由韻律による質直な表現」「獨立的・個性的」[注1]等の評語に端的に要約されている。しかしたとえば次にあげる陳子昂と李白の作品を考える時、陳子昂の詩にはまた別の更なる表現上の特色が窺われるように思える。

禺山・金碧路　禺山　金碧の路
此地饒英靈　此の地　英靈に饒む
送君一爲別　君を送つて一たび別れを爲し
悽斷故鄉情　悽斷す　故鄉の情
片雲生極浦　片雲は極浦に生じ
斜日隱離亭　斜日は離亭に隱る
坐看征騎沒　坐しく征騎の沒するを看
唯見遠山青　唯だ遠山の青きを見る

（陳子昂・送殷大入蜀）

青山橫北郭　青山　北郭に橫たはり
白水遶東城　白水　東城を遶る
此地一爲別　此の地　一たび別れを爲し
孤蓬萬里征　孤蓬　萬里に征く
浮雲遊子意　浮雲は遊子の意
落日故人情　落日は故人の情
揮手自茲去　手を揮つて茲より去れば
蕭蕭班馬鳴　蕭蕭として班馬鳴く

（李白・送友人）

（兩作品に共通する語には。、使用される位置も同一の語には・を付した。）

古體・近體という形式上の差異は一まず措く。語彙、措

辭、素材の共通性に注目すると、李白の「送友人」は「送殷大入蜀」にあやかつていたであろうことは充分に想定される。さらに「送殷大入蜀」の末二句の表現手法（視點を對象に集中し、その消失の瞬間、無限に擴散する）は、李白「黄鶴樓送孟浩然之廣陵」の轉・結句「孤帆遠影碧空盡、唯見長江天際流」の手法の先行例でもある。陳子昂と李白の関係も「感遇詩三十八首」と「古風五十九首」を核にして論じられてきたが、(注二) 右の引用例をみると、李白は決してただ「感遇詩」を通してのみ陳子昂を受容していたのではなく、より感覺的な面においても繼承していたと思われる。本稿は陳子昂詩を特徴づけている、また後の詩人にも確かに受容されていた表現上の特色と感覺的な個性の把捉を試みたものである。

一

陳子昂の詩を通覽すると、全作品百二十八首の三分の一近くを占める「感遇詩三十八首」とともに、いくつかの特徴的な文字や語彙が多用されているのにも氣づく。たとえば「白」（百二十八首中六十四例）「青」（同　四十五例）「雲」（同　七十例）。更に「白日」「白雲」「青春」「峨眉」など、初唐期の他の詩人にはみられない獨特な使用がなされている語彙がある。これらの文字や語彙は作品の中でどのように使用されているのか、またそこから窺われる表現上の特色は何か、についてまず考えたい。

「白日」が陳子昂詩に多用される語彙であることは、清水茂氏が既に指摘しておられる。(注三) 初唐期にあつて、百二十八首中十一例というその使用頻度は確かに特異である。「白日」は楊炯（三十三首中一例）宋之問（百九十六首中一例）李嶠（二百九首中一例）張九齡（二百十七首中一例）盧照鄰（百四首中二例）駱賓王（百三十一首中四例）などから明らかなごとく初唐の詩人にはあまり見られない語彙であり、後述するように、その使用のされ方も陳子昂とは微妙に異なつている。初唐期における「白日」の用例には次のようなものがある。

(1)應須駐白日、爲待戰方酣（盧照鄰・戰場南）
(2)寸心明白日、千里暗黄塵（楊炯・戰場南）
(3)閃閃青崖落、鮮鮮白日皎（張九齡・入廬山……）
(4)珠幡映白日、鏡殿寫青春
（劉憲・奉和幸大薦福寺應制）
(5)飛雲霞層閣、白日麗南隅（李嶠・城）
(6)此室玄扃掩、何年白日開（駱賓王・丹陽刺史挽詞）

(7)何如開白日、非復覩青天（駱賓王・樂大夫挽歌詩）
(8)無復綺羅嬌白日、直將珠玉閉黃泉（宋之問・傷曹娘）
(9)丹鳳朱城白日暮、青牛紺轎紅塵度（駱賓王・帝京篇）

「白日」の意味について、清水茂氏は「『白日』はほぼ『日』にひとしいにしても、……『光明の太陽』という意識ははたらき得るであろう。」と述べておられる。(注四) これら初唐期の使用例で「白日」は、先ず(4)(5)(9)のように現實性豊かな對象性・太陽（或はその輝き）として使用される。それは空に輝く太陽でもあり、(9)「帝京篇」にみられるように、帝都の繁榮を祝福するかのように沒して行く夕日でもある。さらにこうした現實性豊かな用例以外に、「白日」は(2)のように心のあり方を表現する語として、また(6)(7)(8)のごとく黃泉に對してこの世の明るさを象徴するといつたやや抽象的な語としても用いられている。

では「白日」は陳子昂の詩において如何に用いられているのか。

灼灼青春仲　灼灼として青春は仲し
悠悠白日昇　悠悠として白日は昇る
聲容何足恃　聲容　何ぞ恃むに足らんや
榮客坐相矜　榮客　坐ろに相矜る
願與金庭會　願はくは與に金庭に會して
將待玉書徴　將に玉書の徴を待たんとす
還丹應有術　還丹　應に術有るべし
烟駕共君乘　烟駕　君と共に乘らん（題李三書齋）

ここで「白日」は仲春の空に昇り輝く太陽として機能している。「玉書」「還丹」「金庭」「烟駕」等の語が示すごとく、神仙世界への願望がこの詩の主題であり、「白日」によつて示される眞畫に仙人となる、いわゆる「白日昇天」の狀況が一要素となつている。「灼灼青春仲、悠悠白日昇」は呈示されている神仙世界の狀態を規定する句であり、感覺的觀點からは、その明るさや輝きが注目される。

こうした損なわれることなく空に輝く太陽としての「白日」に類似したものには、更に「携手登白日、遠遊戲赤城」（修竹篇）がある。しかしこうした例は僅に二例にすぎず、他の九例はまた異なつた用いられ方をしている。

蒼蒼丁零塞　蒼蒼たり丁零の塞
今古緬荒途　今古　荒途緬かなり
亭堠何摧兀　亭堠　何ぞ摧兀たる
暴骨無全軀　暴骨に全軀無し
黃沙漠南起　黃沙　漠南に起こり
白日隱西隅　白日　西隅に隱る
漢甲三十萬　漢甲　三十萬

曾以事匈奴　曾て以て匈奴を事とせしに
但見沙場死　但だ沙場に死するを見る
誰憐塞上孤　誰か塞上の孤を憐れまんや（感遇其三）

この詩は、羅庸の『陳子昂年譜』をはじめとして諸氏とも、陳子昂二十六歳、垂拱二年（六八六）彼が喬知之の北征に従つた時の作とする。次第に光を失い、巻き上る砂塵に陰り沒して行く太陽は、邊塞の一風物であり、この世界が暴骨に全軀なき戰場である故の悲愴さを帶びている。しかし光あるものが失なわれてゆく「白日隱西隅」という表現には、單に戰場の風景の持つ悲愴さには止まらぬ、それ以上のものが開示されているように思われる。

聞君東山意　聞くならく君東山の意ありて
宿習紫芝榮　宿に紫芝の榮を習ふと
滄州今何在　滄州　今何くにか在らん
華髮旅邊城　華髮　邊城に旅す
還漢功既薄　漢に還れば功は既に薄く
逐胡策未行　胡を逐ふ策は未だ行なはれず
徒嗟白日暮　徒らに白日の暮るるを嗟き
坐對黃雲生　坐しく黃雲の生ずるに對す
桂枝芳欲晚　桂枝　芳　晚ならんと欲す
薏苡謗誰明　薏苡　謗　誰か明らかにせんや
無爲空自老　無爲にして空しく自ら老い
含嘆負平生　嘆きを含みて平生に負く
（題居延古城贈喬十二知之）

陳子昂は喬知之に從つたこの年、居延海から張掖河、同城へと進み、七月に一人南旋して、八月には張掖にもどつている。この詩はその途中で書かれたと推定されるが、ここには既に陳子昂の詩作品の重要な一主題である隱逸への傾斜が現われている。彼における隱逸は神仙世界への傾倒と結びつき、現實の政治世界の中にあつて官僚人として活躍することに挫折してゆく過程で求められるものであつた。喬知之に寄せた「還漢功既薄、逐胡策未行」「薏苡謗誰明」等の句は、また陳子昂自身と政治世界との軋轢の表現でもあり、「桂枝芳欲晚」「無爲空自老、含嘆負平生」は結果した挫折感の表出である。暮れゆく太陽、黃雲は「感遇其三」と同樣に、居延の古城から望まれた景物であるが、それは彼にとつてただ凝視し嗟嘆するしかない對象性である。逆に言えば、「白日」は己れが限りなく思慕するものであり、それ故に暮れゆく「白日」は嗟嘆の對象となつているのだと言える。「擊劍起歎息、白日忽西沈」（登薊丘樓送賈兵曹入都）においてもやはり「白日」は歎息の動因となつている。

この他「白日」は二度と戻らぬ太陽、沈みゆく太陽として機能している。「登山望宇宙、白日已西暝」（感遇　其二十二）「白日毎不歸、青陽時暮矣」（感遇　其七）「遲遲白日晩、嫋嫋秋風生」（感遇　其二）「芳歳幾陽止、白日屢徂遷」（西還至散關答喬補闕知之）「良辰在何許、白日屢頽遷」（贈趙六貞固）「路轉青山合、峯迴白日曛」（入東陽峽與李明府船前後不相及）。

こうした使用は、他の初唐の詩人たちにはみられないものである。

では「白日」が單なる景物以上のものである時、いかなる意味が與えられていると考えられるのか。まずそれは、忽ちに經過してしまう、またそれ故に貴い良き時を意味している。「白日毎不歸、青陽時暮矣」「遲遲白日晩、嫋嫋秋風生」「芳歳幾陽止、白日屢徂遷」「良辰在何許、白日屢頽遷」は、時節、人生の盛時、友人と共にした樂しい期間など、いずれもすばらしい良き時が推移し損なわれてゆくことを呈示している。更に「白日」の意味について鈴木修次氏は『「白日」すなわち太陽は、從前の詩人がしばしば天子の象徴としてうたつた。』（注五）と述べておられるが、「感遇　其三」に示された砂塵の巻き起こる中を沒して行く太陽の形象は、直接には嘗て匈奴討伐に從い、戰場に絶えた軍勢の運命を暗示し、また彼が限りない思慕を寄せる唐王朝の運命に對する彼なりの豫感である、と解釋される時、始めて單なる戰場の風景以上のものとなる。「題居延古城贈喬十二知之」についても同樣のことが言える。喬知之は華髪（白髪）の老人になつても邊境に留まり、匈奴を事として いる。一方、朝廷には巧臣が榮え、邊塞での功績など一顧だにされぬ。暮れゆく「白日」は、巧智と榮達を信條とする巧臣たちによつて腐蝕されてゆく朝廷の榮光の象徴であり、またそれ故にこそ陳子昂にとつて嗟嘆の對象となつているのである。

ところで「白日」にすばらしい良き時、唐王朝の榮光や神仙世界の象徴を見るとともに、それがたとえ沒して行くものであつても、本來的には輝く太陽として用いられていたことにも注目すると、陳子昂の表現の特色として、こうした「白日」のように明るく輝くエネルギィの集合體の如きものへの強い愛着ということが想定されるのではあるまいか。彼が希求していた神仙世界にあつて「白日」は、「灼灼として青春仲し、悠悠として白日昇る」というように本來の光輝あるものとして描かれる一方、現實の世界では、例えば「徒らに白日の暮るるを嘆き、坐しく黄雲の生ずるに對す」「山に登りて宇宙を望めば、白日は已に西に暝（かたむ）く」

等の句が示すように、いずれも常に損なわれて行く存在として描かれている。焦躁感、悲哀感は「今日も晩れてゆく」(注六)『白日』の情景によつて表わされているのではなく、「白日」は本來輝きわたるべき存在であるにもかかわらず傾き沒してゆかねばならない、そして一たび沒すれば二度と昇ることはない、という如何ともしがたい矛盾にみちた構造に孕まれているのである。

阮籍のスタイルに倣つた徐晶の「阮公體」

秦王按劍怒　秦王は劍を按じて怒り
發卒戍龍沙　卒を發して龍沙を戍らしむ
雄圖尚未畢　雄圖は尚ほ未だ畢はらざるに
海內已紛拏　海內　已に紛拏たり
黃塵暗天起　黃塵は天を暗くして起こり
白日斂精華　白日は精華を斂む
唯見長城外　唯だ見る長城の外
僵屍如亂麻　僵屍　亂麻の如きを

という作品が偶然にも示すように、陳子昂の「白日」の使用は阮籍のそれに近い。阮籍には次のような「白日」の用例がある。

(1)娛樂未終極、白日忽蹉跎（詠懷其五）
(2)西方有佳人、皎若白日光（詠懷其十九）
(3)朝陽不再盛、白日忽西幽（詠懷其三十二）
(4)願攬羲和轡、白日不移光（詠懷其三十五）
(5)白日頹林中、翩翩零路側（詠懷其七十一）
(6)白日隕隅谷、一夕不再朝（詠懷其八十一）

(1)(3)(5)(6)では、いずれも忽ちに經過して二度とは戻らない盛時・よき時を暗示するものとして、それ故の愛惜をこめて使用されている。唯、阮籍の例では「白」字に對して色彩を呈示する語は用いられていない。それに反して陳子昂詩では、青春―白日、黃沙―白日、白日―黃雲、白日―青陽、青山―白日、白日―赤城のごとき例がみられる。阮籍が表現のもつ意味機能により重點を置いているのに對し、陳子昂は、その感覺的な作用にも多く意を用いているのである。

二

陳子昂詩には七例の「青春」の用例がある。「白日」の「白」がそうであつたように、「青春」の「青」字もまた單に添えられているにすぎない語であるが、やはり「青」にも何らかの感覺的な特性が付與されているように思われる。そこでまず「青」について、その四十五例に及ぶ使用例から主なものを列擧し檢討する。

(1)吾愛鬼谷子、青溪無垢氛。（感遇其十一）
(2)路轉青山合、峯迴白日曛。（入東陽峽……）
(3)銀燭吐青烟、金樽對綺筵。（春夜別友人）
(4)坐看征騎沒、唯見遠山青。（送殷大入蜀）
(5)青郊樹密、翠渚萍新。（三月三日宴王明府山亭）(注七)
(6)汎灩青流滿、葳蕤白芷生。（于長史山池……）
(7)黃鶴烟雲去、青江琴酒同。（春晦餞陶七……）
(8)聞道白雲居、窈窕青蓮宇。（酬暉上人……）
(9)青苔空萎絕、白髮生羅帷。（感遇其二十六）

(1)(7)は鬼谷子、暉上人の住む世界の清らかさを示し、(3)(4)(7)は別れの場を彩るものの持つ清浄さを呈示している。また(5)(6)は青流—白芷、青郊—翠渚という對によつて、やはり宴の張られている場の清浄な雰圍氣を醸し出している。「青」には「青蠅一相點、白璧遂成寃」（宴胡楚眞禁所）のあおばえという一例もあるが、概ねはそれぞれの場に清浄感を與える機能をはたしている。

「青春」についても、これを「陽春」「芳春」等の語に比較すれば、やはり何らかの清浄な、あるいは色彩的感覺が付與されていると考えてよいだろう。たとえば、

灼灼青春仲、悠悠白日昇。（題李三書齋）
紫塞白雲斷、青春明月初。（春夜別友人）

これらの例では、「青春」は清らかさを伴いつつ躍動するすばらしい良き時節として用いられている。しかし後者の「青春明月初」には、このすばらしい春に友人と別れねばならないのか（「離憂悵有餘」）という對立する悲哀の表出が續く。さらに、

春青兮不可逢、況蕙色之增芬（綵樹歌）
怨青春之萎絕、贈瑤華之旖旎（春臺引）
春青始萌達、朱火已滿盈（感遇其十三）

のごとく、「白日」がそうであつたように、「青春」もまた推移し失なわれてゆく存在として機能している。この表現形式は「春臺引」に最も集約的に現われている。

感傷春兮、生碧草之油油、懷宇宙以湯湯、登高臺而寫憂。遲美人兮不見、恐青歲之還遒。從畢公以酣飲、寄林塘而一留。採芳蓀於北渚、憶桂樹於南州。何雲木之英麗、而池館之崇幽。星臺秀士、月旦諸子。嘉青鳥之辰、迎火龍之始。挾寶書與瑤瑟、芳蕙華而蘭靡。乃掩白蘋、藉綠芷。酒既醉、樂未已。擊青鐘、歌綠水。怨青春之萎絕、贈瑤華之旖旎。願一見而導意、結衆芳之綢繆。曷余情之蕩漾、矚青雲以增愁。恨三山之飛鶴、憶海上之白鷗。重曰、羣仙去兮青春頹、歲華歇兮黃鳥哀。富貴榮樂幾時兮、朱宮翠堂生青苔。白雲兮歸

來。

「青歳」「青鳥」「青鐘」「青春」「青苔」など七例の「青」字が使用され、清浄な色彩的感覺を作品に添えている。そして雜言の自由な韻律の中で「青春の萎絶するを怨み」「群仙は去り青春は頽る」と言うように、すばらしい良き時である春が推移し失なわれてゆく存在として深い愛惜の念とともに歌われている。こうした表出は「白日」のそれと軌を一にする。

清浄な視覺的形象を持つ「白雲」もやはり陳子昂の好んだ語彙であり、ほぼ以上考察してきた方向に沿つて用いられている。

「白雲」はまず「白い雲」の意で、「白雲半巖足」「紫塞白雲斷」「樹斷白雲隈」「遺跡白雲隈」など清浄さを伴つた自然物の一として用いられる。またこうした用例とともに十九例に及ぶ「白雲」は、

平生白雲意　疲薾媿爲雄（東征答朝臣相送）
平生白雲志　早愛赤松遊（答洛陽主人）
念與楚狂子　悠悠白雲期（感遇其三十六）
囊括經世道　遺身在白雲（感遇其十一）
宿昔感顏色　若與白雲期（感遇其三十二）
聞道白雲居　窈窕青蓮宇（酬暉上人……）
白雲蒼梧來　氛氳萬里色（古意題徐令壁）

のごとく、作品に清浄感を付與する自然の一景物である以上に、象徴的な語彙としても機能している。

平生白雲志　平生　白雲の志
早愛赤松遊　早に愛す　赤松の遊
事親恨未立　親に事へては未だ立たざるを恨み
從宦此中州　此の中州に從宦す
……（答洛陽主人）

「赤松」とは『楚辭』に「聞赤松之清塵兮」「與赤松而結友兮」と言及されている上古の仙人で、以來詩中に頻出する。「早に愛す　赤松の遊」とは、若い頃から神仙の世界に傾倒していたことを指し、「白雲の志」とはそうした赤松子のごとき生き方への志向を言う。

吾愛鬼谷子　吾は愛す　鬼谷子
青谿無垢氛　青谿　垢氛無し
囊括經世道　經世の道を囊括し
遺身在白雲　遺身して白雲に在り
七雄方龍鬬　七雄は方に龍鬬し
天下久無君　天下に久しく君無し
浮榮不足貴　浮榮は貴ぶに足らず

遵養晦時文　遵養して時文を晦ます
舒可彌宇宙　舒ぶれば宇宙に彌つべく
卷之不盈分　之を卷けば分にも盈たず
豈圖山木壽　豈に山木の壽を圖り
空與麋鹿羣　空しく麋鹿の羣と與にせんや

（感遇　其十一）

「遺身在白雲」とは隱逸のことである。しかしその隱逸は現實の政治世界から身を退き、ただ山木の如き長壽を希うためのものなのではなく、心中には卓拔な才能（經世の道）を有しつつも、それを活用すべき時、人がない故に、悠然たる心境で青谿に起居しているのである。それは『莊子』天地篇に言う「天下有道、則與物皆昌。天下无道、則脩德就閒。」また『論語』述而篇に言う「用之則行、舍之則藏。」の意況を示している。この「脩德就閒」「藏」の心境にある人間の住む邊に白雲は湧き起こる。「白雲」はそうした人間の心境の象徵であり、陳子昂の場合、それは「答洛陽主人」でも明らかなように、神仙世界と直接結びつく語である。「白雲」によつて象徵される隱逸への強い愛着は、先に擧げた諸例が示しているが、「春臺引」の亂「群仙は去り青春は頹る、歲華は歇き黃鳥は哀しむ。富貴榮樂幾時ぞ、朱宮翠堂に青苔生ず。白雲は歸來す。（羣仙去兮青春頹、歲華歇兮黃鳥哀。富貴榮樂幾時兮、朱宮翠堂生青苔。白雲兮歸來。）」において「白雲兮歸來」というリズムの轉換による強調された表現に最も端的に現われている。

しかしこの「白雲」もまた彼が身を處す世界の現實にむかう時、次の詩が如實に示すように、悲嘆の對象としかなりえなかつた。

……　……
變化固幽類　變化は固より幽類たり
芳菲能幾時　芳菲　能く幾時ぞ
疲痾苦淪世　疲痾して苦だ世に淪み
憂悔日侵淄　憂悔　日に侵淄す
眷然顧幽褐　眷然として幽褐を顧み
白雲空涕洟　白雲　空しく涕洟す

（感遇其三十三）

三

これまで特徵的な文字や語彙にみられる表現の特色について述べてきたが、この節では前節でもとめられた特徵が、數句或は一首全體にわたつても妥當するものであるかどうかという問題を檢討したい。

銀燭吐青煙　銀燭は青煙を吐き

金樽對綺筵　金樽は綺筵に對す
離堂思琴瑟　離堂　琴瑟を思ひ
別路遶山川　別路は山川を遶る
明月隱高樹　明月は高樹に隱れ
長河沒曉天　長河は曉天に沒す
悠悠洛陽道　悠悠たり洛陽の道
此會在何年　此の會　何れの年にか在らん

（春夜別友人其一）

「銀燭」「青煙」「金樽」「明月」「長河」「曉天」等、いずれも離別の場を相應しく彩る清淨で輝く形象を備えた語彙が配されている。また「明月隱高樹、長河沒曉天」明るく輝く月が高い樹の間に隱れ、銀河は明けゆく空にその光を失つてゆく、という表現は光あるものの喪失という形象であり、これは友人との別離の悲哀を最も印象的に語つている部分である。送別詩における光あるものの喪失の形象は「葉上涼風初、日隱輕霞暮」（謝朓・臨溪送別）「明月沈珠浦、秋風濯錦川」（王勃・重別薛華）など六朝から初唐にかけて例があり、陳子昂の創出によるものではないが、やはり彼が己れの性向ゆえに繼承したものであり、陳子昂的表現形式と言えよう。更に、

○美人挾趙瑟、微月在西軒。……慇懃玉指繁。清光委衾枕、……（月夜有懷）

○沙浦明如月、……天河殊未曉（宿襄河驛浦）
○惠風吹寶瑟、微月懷清眞（喜遇冀侍御……）
○金絃揮趙瑟、玉柱弄秦箏（于長史山池……）
○的的明月水、啾啾寒夜猿（宿空舲峽……）
○色空今已寂、乘月弄澄泉（夏日遊暉上人房）
○清冷花露滿、滴瀝檐宇虛（春夜別友人其二）

など陳子昂詩には數多くの透明な輝く形象がみられる。

可憐瑤臺樹　憐むべし　瑤臺の樹
灼灼佳人姿　灼灼たり　佳人の姿
碧華映朱實　碧華　朱實に映ずるに
攀折青春時　青春の時に攀折さる
豈不盛光寵　豈に光寵盛んならざらんや
榮君白玉墀　榮君　白玉の墀
但恨紅芳歇　但だ紅芳の歇くるを恨み
凋傷感所思　凋傷して思ふ所に感ず

（感遇其三十）

「碧華」と「朱實」とが美しく映える瑤臺の樹、それは俗を超えた高雅な存在であるにもかかわらず、或はそれ故に最もすばらしい青春の時節に損なわれてしまう。ここには美しい存在物の喪失に對する愛惜が一首全體にわたつて

現われている。次の例も同様である。

翡翠巣南海　翡翠　南海に巣くふ
雄雌珠樹林　雄雌　珠樹の林にあり
何知美人意　何ぞ知らんや　美人の意
嬌愛比黄金　嬌愛は黄金に比すを
殺身炎州裏　身を炎州の裏に殺し
委羽玉堂陰　羽を玉堂の陰に委ぬ
旖旎光首飾　旖旎として首飾光り
葳蕤爛錦衾　葳蕤として錦衾爛く
豈不在遐遠　豈に遐遠に在らざらんや
虞羅忽見尋　羅を虞れ　忽ちに尋ねらる
多材固爲累　多材は固より累と爲る
嗟息此珍禽　嗟息す　此の珍禽を

（感遇　其二十三）

美しく得がたい翡翠、それは自身の價値故に身に禍が及び、損なわれてしまう。「嗟息す　此の珍禽を」と、陳子昂は、こうした存在をまた己れ自身の象徴としてみつめ、限りない愛惜をこめて嘆息する。

張九齢は或はこの作品を意識して「感遇十二首　其四」を作つた。

孤鴻海上來　孤鴻　海上より來たり
池潢不敢顧　池潢　敢へて顧みず
側見雙翠鳥　側に見る　雙翠鳥の
巣在三珠樹　巣くふて三珠樹に在るを
矯矯珍木巔　矯矯たる珍木の巔も
得無金丸懼　金丸の懼無きを得んや
美服患人指　美服は人の指ささんことを患へ
高明逼神惡　高明は神の惡みに逼る
今我遊冥冥　今　我れ冥冥に遊ばば
弋者何所慕　弋者　何の慕ふ所ぞ

だが翡翠の他に悠然と飛翔する鴻を導入したこの作品は超越的視點を持ち、陳子昂詩にみる本來美しく輝くべき存在が、それ自身の價値故に損なわれねばならないという矛盾を孕んだ狀況の持つ悲哀感は全くみられない。

以上、繁雜ながら語彙から一首全體の表現形式にわたるまで、陳子昂詩の特色を調査してきたが、その結果次のような特徴がもとめられた。

(1) 陳子昂は「白日」「青春」「白雲」など明るい輝きや清らかさ或は力強さといつた形象を持つもの、また俗を超えた美しきものに對して、他の詩人にくらべて極めて強い愛着を抱いている。

(2) その愛着の對象は、彼が思慕していた世界（多く神仙

世界と結びついている）では本來のままの姿で存在するが、現實の世界では、それ自身の持つ特質（價値）のために損なわれゆく存在、嗟嘆の對象としかなり得ないものとして表現されている。このいかんともしがたい矛盾の構造とその矛盾故に生ずる焦燥・愛惜・悲哀感が陳子昂詩の底に常に存在している。

(3)こうした特色は語彙、句から一首全體にわたつて現われている。

陳子昂詩の表現の基底に、こうした特色を想定することによつてはじめて、彼を單に「感遇詩」に代表される詩人として、あるいは「登幽州臺歌」等にみられる激しい感情を吐露する詩人としてのみ想定したのでは把握できない一面が明らかになる。

冒頭に引用した「送殷大入蜀」の最も特徴的な部分、そして李白がみたものは、清淨な形象と光あるものの喪失という表現の構造を持つた「片雲生極浦、斜日隱離亭」、そして青い山なみの中に姿を沒してゆく友人の形象「坐看征騎沒、唯見遠山青」であつたろうと思われる。

（筑波大學附屬高校教諭）

〈注〉

注一、高木正一氏「陳子昂と詩の革新」（『吉川博士退休記念中國文學論集』所載）にみえる。

注二、代表的な論考に豐田穣氏『唐詩研究』第四章「陳子昂と李白」、また大野實之助氏『李太白研究』「李詩の源流・二、陳子昂」がある。

注三、清水茂氏「白日の解釋（釋白日）」（『吉川博士退休記念中國文學論集』所載）。

注四、清水茂氏、同論考。

注五、鈴木修次氏『唐代詩人論』「陳子昂論」。

注六、森野繁夫氏『六朝詩の研究』「集團の文學から個の文學へ三、陳子昂」にみえる。

注七、『全唐詩』は陳子昂のこの作品の他に崔知賢、庶元明、韓仲宣、高球、高瑾の同題の作品を收めている。その崔知賢の項には、「同賦六人。孫愼行爲之序。」としてその序を載せる。その序には「調露二年、云々」とある。調露二年は六八〇年。八月には永隆と改元しているから、彼らが會したのは六八〇年三月三日である。ところがこの年、陳子昂は二十歳であり、「陳氏別傳」の「年二十一（現行の年譜では六八一年）、始東入咸京。」と合致しない。現行の年譜による限り、この作品が果して陳子昂のものであるか否か、些か疑問の殘るところである。